

丹波市立看護専門学校関係者評価委員会

開催日時 令和8年6月2日（火） 15時30分～16時30分
場 所 丹波市立看護専門学校
出席者 （委員長）実習施設職員、（副委員長）本校の卒業生、本校在学生
の保護者、地域住民、校長
事務局 健康部長、副校長、事務長、教務主任

【主な意見等】

○令和7年度自己点検・自己評価総評について

- ・市内や県内の就職者が多いのは、地域に根差したカリキュラム内容や実習の効果と言える。
- ・入学生のアンケートで、学校の雰囲気がいい。先生が優しい等の評価が得られていることは素晴らしいことである。このことを様々な媒体を活用し、効果的にPRすることで、学生確保に努めて欲しい。
- ・オープンキャンパスは学校を知ってもらえる効果の高い取組である。さらに内容を充実させ、より多くの方が学校に来て下さるよう工夫していただきたい。

※以下に、自己点検・自己評価の総評を掲載

令和7年度 自己点検・自己評価 総評

【Ⅰ 教育理念・教育目的】【Ⅱ 教育目標】

現代社会は、価値観の多様化、高学歴化、情報社会となっており、医療においても高度な医療技術や安全・安心な質の高い医療サービスの提供が求められている。当校は市を設置主体として、「市内の医療機関や介護施設等への看護師確保対策」を目的に学校が設置されていることから、丹波市内や近隣の市町へ就職し、地域に貢献できる看護師の育成が求められている。

これらを踏まえ、教育理念では、丹波市の理念である『丹(まごころ)の里』を基盤として、①丹波市への愛着と誇りをもち、人としての思いやりのある看護師を育成していくこと ②丹波市内の病院を始めとして近隣の施設や地域で活躍できる看護師を育成すること ③的確な状況判断のもとエビデンスに基づいたアセスメントをし、対象に応じた看護が実践できる看護師を育成していくことを掲げている。学校のポリシーは、①求める入学生像 ②カリキュラム編成の方針 ③卒業時の姿 ④教育の検証・評価の指針 として示し、到達すべき方向が学生にも職員にも理解できるようにし、教員・学生の指針となっている。その結果として令和7年度の卒業生の75%が兵庫県内に就職し、そのうち 32.5%が丹波市内に就職する予定である。丹波医療センターや香良病院、大山記念病院等の実習病院への就職は全体の 40%であった。昨年度より丹波市内への就職率が上昇しており実習病院での指導体制の影響が就職に繋がっている。

地域への愛着形成に向けて、地域の特徴を知る授業として『企業見学』『地域魅力発見』『暮らしを支える看護Ⅱ』を実施し、フィールドワークを通して学生が主体的に丹波の魅力や住民のニーズを調査している。学生へのアンケート実施後の結果から、「いつもどおりの生活が続ける事が自分らしさを支えており、地域とのつながり特に顔の知れた人間関係が生活を豊かにしている」「丹波市の方の温かさを感じた」「過疎化が進み商業地からも遠く私たちから見れば生活しづらい地域でも当事者は助け合い支えあっている姿から、その人の価値観で生活をみることが必要」などの意見があり、昨年度より生活に入り込んだ視点で学習できており、地域の方に学生を育てていただいていることが実感できた。次年度は更に学生が提案できるような授業の進め方を工夫していきたい。また、授業以外にも地域でのボランティアに参加するなど丹波市の魅力や特徴を実感し、市内に就職を希望する卒業生を増やしていく必要がある。

【Ⅲ 教育課程経営】

教育課程は、基準カリキュラムに基づいて、基礎分野、専門基礎分野、専門分野の3つから編成し、国家試験の受験条件である『97単位・3000時間以上』の学習時間を確保し、『105単位・3030時間』で構成している。

カリキュラムデザインは、学生が学習内容を理解しやすいように、漸進的カリキュラムデザインを選択し、総論から各論、単純なものから複雑なもの、抽象から具象へなど、基礎分野、専門基礎分野で学習したことを基盤として専門分野に繋がられるように考慮した配列としている。

はじめて医療に関する学習を進める上で、学習内容が理解しやすいように配置できており、学生にはカリキュラムツリーを提示し科目間の関連性が理解できるよう支援している。

外部講師の割合が91%を占める中、講師の都合で科目の順序立てが思うように進まない場合もあり、専門分野の内容が先行するなど、逆思考での学習となることもあるが、看護師にとつ

て必要な思考でもあり、柔軟に対応できる学生を育てることに繋がっており問題はないと思われる。

【 IV 教授・学習・評価過程 】

授業科目に関しては、科目ごとにシラバスを作成し、科目目標、学習内容、学習方法、使用するテキスト、提出物、成績評価の方法を記載し、学生に提示している。学習が効果的に進むように、関連のある内容をまとまりとして配置しているが、講師の都合、科目の進度によって開講時期に間隔が空いてしまうことがある。できる範囲で科目のくくりを近い時期に開講できるように調整していく。

専門分野の授業科目は、7領域別に各看護学の担当者が中心的に担い、年度末に担当する看護学の内容を評価することで、看護学の領域や関連科目の領域での科目の重複や不足を確認できている。また、各自が責任をもって1つの領域看護学を担当するため、タイムリーな変更ができています。

各科目の中に当校で特色として強化したい内容（臨床判断・地域連携など）をカリキュラムの中に取り込めており教員が学校の方向性を理解してカリキュラム内容がアップデートできている。

【 V 経営・管理過程 】

設置主体が丹波市であることから、市の税金・地方交付税、県からの補助金、学生の入学金・授業料などを財源として運営している。

2019年9月に校舎を新築移転したことで、学生がリラックスできるスペースや自己学習ができる場所が確保できた。教室、実習室のスペースも広くとることができ、学習環境は整っていると考える。遠方から入学している学生に対しては、ワンルームマンション形式の学生寮を整備し、遠方からの学生を支援している。

実習施設は、同敷地内にある県立病院を中心に、公共交通機関で通学できる場所、通学時間が1時間以内の場所に確保し、学生の金銭的負担、時間的負担に配慮している。今後もできる範囲で近隣での実習施設の確保を進めていきたい。

【 VI 入学 】

学校が求める学生像のアドミッションポリシーを作成し、それに基づいて10月に地域枠入学試験、12月に一般入学試験を実施している。入学定員40名に対して、地域枠入試は15名程度、一般入試は25名の入学を許可している。試験実施までに入学試験委員会を開催し、前年度の評価を行い問題点や改善点を明らかにして、試験実施に関する内容を検討、決定している。

全国的に受験者数の減少が顕著であり、当校も昨年度は前年比25%減少し、今年度は昨年と同数であった。減少の背景には少子化による18歳人口の減少に加え、大学進学希望者が増加していることは継続した課題である。とともに大学の受験日程の早期化や推薦枠の拡大および入試科目の削減などの影響が大きい。

社会人受験者も減少（前年比18%減）しており社会の求人増と当校の受験科目の多さが受験しづらい要因となっている。今後は社会人の確保対策と並行して看護師という仕事を理解してもらうために小・中学生から取り込める工夫が必要と考える。引き続き受験者の確保対策の工夫（進学説明のエリアを拡大、社会人の取り込み、市内の学校への進学者を確保するため

にオープンキャンパスの対象者の拡大やトライやるウィークの受け入れ継続など)を強化し、受験者数・入学者数の増加に向けて対策を図りたい。

【 VII 卒業・就職・進学 】

教育理念・教育目的・教育目標に従ってカリキュラムを運営し、学則に基づいて単位が取得できた学生に対して卒業を許可し、専門士の称号を授与している。今年度は退学者はなく、休学者・留年者ともに数名であった。進路決定に揺れる学生や社会人基礎力の弱さなどの課題が見られる学生など多様化しており、今後は更に増加する可能性がある。しかし、入学した学生が目標に向かう3年間学んでいけるように支援していくことが使命であるため、支援者である教員の質の確保についても引き続き取り組んでいく。

学生が主体的に行動できるように、グループディスカッションができる演習室・研究室を複数設置し、アクティブラーニングができる環境を整えている。又、他者との意見交換をすることで、自ら考え、判断し、行動できるように、アクティブシンキングの育成に力を入れ、現代の若者の弱みを強みに変換できるように工夫する必要がある。

現在取り組んでいる国家試験対策は基礎的な知識の定着に有効だと考えるが令和7年度の国家試験の結果を踏まえ、対応ができるように新たな対策を講じていく。入学時から自己学習力の習慣がついていない学生が多く、入学前準備教育から国家試験対策まで活用できるe-ラーニングシステムを3学年とも導入した。効果的に活用し、成績に反映できるよう効果を評価していく。

新カリキュラムでの実習の2年目となり、昨年度以上に地域の施設に協力を得て実施できた。地域をフィールドとして各実習施設に出向き、地域の方から支えていただき実習が効果的に運営できていることに感謝する。実習病院では受け持ち患者を通して机上学習と現場での体験を結びつける機会となっているが、入院日数の短縮化や複雑な疾患を抱えて入院される患者が多く、学生が実際に手が出せる援助には限りがある。そのため、援助する機会が減少し学生は技術に自信が持てないこと、状況を判断する能力が弱い傾向にある。臨地に出る時間は確保されたが内容には課題が残る。そのため学内実習において、シミュレーション機器を用いて状況判断や観察をする学習を行うことや、電子カルテ上の模擬患者にて看護を展開していくなどリアリティさを出し考えさせる工夫をして補っている。また、現代の若者は異世代の方とコミュニケーションをとる機会が少なく、コミュニケーション能力が弱いため、継続してコミュニケーション力強化のための合同学習や他校との協働学習、異学年交流の継続、臨地実習の工夫、フィールドワークの機会を増やすことで場を設定しており、それらを経験する中で、学生の成長を想っていききたい。